

性を内外に示した。
 次の転機は、2001年の9・11米国同時多発テロ事件後、アフガニスタンにおける緊急救援活動である。食料支援活動に従事する中、10歳ほどの男子が自動小銃を担いで配給の食料を取りに来るなど「食料がなくても銃がある」という現実を目の当たりにし、さらに教育支援の重要性を痛感すると、2003年に現地に事務所を設立、その初代所長に就任した。学び舎の重要性を唱えると共に、子どもたちが読んでも楽しめる絵本出版や図書室の建設も進めたが、当時、絵本は皆無であり、読み聞かせや読書推進に対しては、学校現場では否定的であった。しかし16年経過した現在、その基盤づくりの甲斐もあり、活動は継続。現地の教育関係者から賞賛の声があるまでになっている。

一方で市川氏は、所属団体の活動だけでは限界があると感じ、国内外の緊急救援やNGOのさまざまなネットワークの設立、関係構築にも奔走した。阪神・淡路大震災では、仮設住宅の住民をボランティア団体全体で支援するために、「阪神・淡路大震災『仮設』支援連絡会」(現・被災地NGO協働センター)を立ち上げ、その事務局長として30団体以上の活動を取りまとめ、行政との意見調整を図った。また、2000年にNGO・政府・企業が一体となってNGOの緊急救援活動を支援する「JPF(ジャパンプラットフォーム)」を設立した際、初代副代表に就任しNGO全体の底上げにも貢献した。近年では、NGO100団体以上が加盟する日本最大のネットワークNGO「JANIC(国際協力NGOセンター)」の副理事長も務め、NGO・外務省定期協議会の連携推進委員として、意見調整や政策提言に取り組み、NGO全体



■アフガニスタンの子どもたちと共に

の基盤づくりにも尽力した。
 この4月でNGO入職30年目という節目を迎える市川氏は、2019年7月から、再度海外の現場のひとつであるシャンティ・ミャンマー事務所所長として、ミャンマー中部に位置するヒー県を中心に子どもたちへの教育文化支援活動に取り組んでいる。「子どもたちが自分の生きている現状を知ることができず、夢と希望を持っていないとしたら、どんなに悲しいでしょうか? 今、全世界で教育を受けられない子どもは、初等教育レベルで6,100万人いると言われていています。子どもたちが、自ら学び、自分で自分の世界を切り開く、そのお手伝いができればと思います」と語る市川氏。今後も、挑戦は続く。



■ミャンマー現地スタッフと市川氏



©Uta Mukuo

いちかわ ひとし
市川 斉
 Hitoshi Ichikawa

公益社団法人
 シャンティ国際ボランティア会
 ミャンマー事務所長
 Director, Myanmar Office,
 Shanti Volunteer Association

1985年静岡大学教育学部卒業。大学在籍時よりボランティア活動を開始。1990年公益社団法人シャンティ国際ボランティア会(以下、シャンティ)に入職。1995年に発災した阪神・淡路大震災をきっかけに、緊急救援・復興支援に関わる。また、2001年9.11米国同時多発テロ事件後のアフガニスタンで緊急救援活動、2003年よりアフガニスタン事務所長として教育支援活動に携わる。2005年シャンティ東京事務所に復帰し、海外事業課長、事務局次長、常務理事に就任。2019年7月より現職。JPF副代表、JANIC副理事長などを歴任。

推薦者

秦 辰也
 近畿大学国際学部
 インターナショナルセンター長・
 学部長補佐・教授

すべての
 子どもたちに
 学ぶ喜びを
 絵本の持つ可能性を信じて

市川斉氏は大学卒業後、「公益財団法人育てる会」の山村留学指導員として5年間、子どもたちの社会教育に専念。その活動を通して「海外の子どもたちの状況を知らずして日本の子どもの教育は語れない」と考え、1990年より海外の難民や子どもの教育支援に関わる国際協力NGO「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会(以下、シャンティ)」に参加した。
 最初の転機は、1995年に発災した阪神・淡路大震災での支援活動。シャンティの責任者としてボランティアの受け入れ、避難所の運営支援、子どもや高齢者支援など、被災者支援プロジェクトを実施。さらに、被災地外から駆けつけたNGOの中では当時最長の2年3カ月に亘って現地に留まり、緊急時のみならずがちな災害救援において、復興支援を視野に入れた活動の重要